明智光秀と京の城－周山城を中心に－

京都市文化市民局文化芸術都市推進室 文化財保護課 課長補佐　馬瀬智光

1　はじめに

京都市右京区京北に所在する周山城跡は，近年，その保存状態の良さ，石垣を多用していること，何より明智光秀が築城したことで注目を浴びている城郭である。すでに多くの研究者が様々な観点からこの城について論述されていることから，今回は，実際に測量や調査を通じて分かったこと，他の織豊系の城郭と比較した時に特徴は何なのかに絞って語っていきたいと考えている。

周山城跡についての歴史史料については福島克彦氏が詳細に分析しているが，同時代史料は極めて限られている。『津田宗久茶湯日記』天正９年８月条に，「同八月十四日ニ丹波國周山へ越候，惟任日向守殿被成御出候，十五夜之月見，彼山ニ而終夜遊覧』とあり，少なくとも天正９年には築城されていたことがわかる。また，『兼見卿記』天正 12 年２月４日条に「辛亥，今朝築州，丹州シヲ山ノ城へ下向云々」，同６日条に「癸丑，朝程雨降，午刻牧庵遣使者，兵庫介（助）（鈴鹿右正），昨朝之礼也，及暮自丹州築州上洛云々，』とあることから，豊臣秀吉が天正 12 年にこの城を訪れていたこともわかる。天正 10 年６月２日の本能寺の変から１年半が経過しており，少なくともこの頃まで周山城は存続していた。

このように文献から推測できることは非常に限定されているが，「縄張り」「城道」「石垣」「天守台」「虎口」「城郭規模」さらに「破城行為」の観点から周山城跡を考察し，この城のもつ「本質的価値」について考えていきたい。

2　縄張り【図１，図２】

周山城跡は，弓削川と上桂川との合流点の西側，標高 509.4mの黒尾山に至る丘陵尾根上に展開している。

基本軸は黒尾山山頂から東に伸びる尾根上に展開するが，郭１（主郭：本丸）から伸びるほぼ全ての支尾根伝いに郭が展開している。

大半の城郭は主尾根の軸線上に郭が展開するが，四方に展開する城郭は大規模城郭に多い。

２条の堀切を挟んで東城と西城の二つの大きなグループに分かれる。一つの城郭が２ないし３つのグループに分かれ，それぞれが中心をもつ例は山城では時々見られる。しかし，東城は石垣を多用し，枡形や折れをもつ虎口，天守台を有するなど，典型的な織豊系城郭の特徴を示すのに対し，西城は現在のところ石垣は確認できておらず，様相が大きく異なる。

3　城道【図１】

現在確認できている城道には以下の３種類がある。

①郭と郭を結ぶ道で，多くは同じ高度にある郭を等高線に沿って結ばれていることが多い。連絡及び兵員の移動を容易にするための道であろう。

②麓と城とを結ぶ道で，谷筋をジグザクに登っていく道

③麓と城とを結ぶ道で，尾根筋を直線に登っていく道

①の道の内，郭２と郭３を結ぶ道で郭２に近い部分，郭５から郭６の南側に沿って伸びる道，南尾根に展開する郭に至る城道は，斜面側を石垣で土留めして造成された道である。

②,③は，いずれも光秀期まで遡る可能性があるが，豊臣秀吉に連なる武将が一時期利用した際に構築された可能性，後の林道経営で造られた可能性，廃城後，尾根伝いの交通路として開削された可能性もあり，現状では決定する要素に欠ける。しかし，郭２～郭３間，郭 11～郭 13 間はジグザク道であり，②のタイプの道が光秀期まで遡る可能性は高いと言えよう。

4　石垣【図９～図 12】

崩壊の危険性があることから，郭５の石垣を緊急補修することを目的に実施した調査であったが，周山城跡では初めての本格的な調査となった。

郭５北面の石垣は最高で５ｍの高さがある。立ち上がりの角度は場所によって異なるが，65 度～ 75 度あり，断面観察した３箇所ではいずれも反りは認められなかった。郭６の北面石垣は高さが低いこともあって，立上がりの角度は 80 度前後であった。郭５の石垣は市内に残存する石垣の中でも高い部類になるが，旧二条城跡の立ち上がりの角度が 40 ～ 50 度，聚楽第跡が 52 ～ 57 度，伏見城跡【指月城期】が 60 度強，伏見城跡【木幡山（伏見山）城期】が 65 度前後となることと比較すると，かなり急角度での立ち上がりを示している。郭５の北面石垣の基底部に据えられた石材は地形の傾斜に合わせて据えられており，中段までは大きめの石材が用いられ，それより上部は小ぶりな石材が積み上げられている。郭５の西面と南面は，北面ほど残りは良くないが，同様の石垣が存在する。

郭５北面の石垣の北西角で郭６の石垣と接続している。

郭６の石垣は高さは１ｍ～1.7m あり，基盤層の高さの変化に合わせて西に向かうほど高くなる。石垣の西端付近で鉤形に屈曲する。また，この石垣は築地塀もしくは板塀の基礎の可能性が高い。その理由は，この石垣は曲輪よりも一段高く，上端幅 1.6m で，北面石垣と並行して南面にも石積が並んでおり，上端は水平であることである。

曲輪５の北西角，曲輪６の北東角と北西角の３箇所とも，二条城のような整った算木積みではないが，石材の長辺と短辺が交互に積まれており，算木積みの古い形態であると言える。旧二条城跡の石垣の隅角部は算木積みではない。坂本城の石垣を視認したが，残りが悪く不明である。聚楽第跡では隅角部の検出事例はない。伏見城跡【指月城期】でも明確な隅角部の事例はなく，伏見城跡【木幡山（伏見山）城期】は徳川期の天守台の事例のみである。武家屋敷では数例あり，桃山町下野の下層石垣の階段袖石は算木積みの可能性がある。浅野屋敷の虎口で隅角部を検出しているが，基底部のみで不明である。

自然石が主体で割石が用いられているが，矢穴はなく，節理に沿って割られたものと考えられる。周山城の基底部になっている黒尾山から伸びる尾根には今でも岩盤が露出している場所が複数あり，それらが石材の供給地となっていた可能性が高い。

石材には小規模なものが多い。2020 年の発掘調査により，墓石を石垣の石材として活用している例が見つかった。間詰石はあるが，裏込めは認められるが極めて薄い。この特徴からも旧二条城と聚楽第跡の石垣構築技術の中間的な要素が強い。

5　天守台【図３】

周山城の天守台は，四周及び内法部分を石垣で固めた土台で出来ている。

穴蔵式の天守台で，同時期で現存するものに安土城跡のものがある。

市内で天守台が残存する例は，周山城跡，伏見城跡【木幡山（伏見山）城期】，二条城，淀城跡である。このうち，穴蔵式の天守台は周山城跡と淀城跡である。

周山城跡の天守台の最大の特徴としては，入口が３箇所あることである。安土城跡や淀城跡の天守台は開口部が１箇所であり，３箇所存在する理由としては，千田嘉博氏によると，天守に入る人物の身分の違いなどの理由が考えられる。

6　虎口【図３，７，８】

全ての虎口を詳細に観察することができるわけではないが，周山城跡の中枢部で観察できた虎口は以下の通りである。

①郭２から石塁で両側を囲まれた通路を通って入る郭１（主郭：本丸）の大手虎口は，最も重厚な構えを見せている。赤色立体地図で明確に表現されているが，郭１の石塁で囲まれた範囲の外側に枡形の虎口がある。この枡形の東端には礎石が残存しており，城内で最も瓦片が採取できることから，瓦葺の門があったと考えられる。この桝型の北西部分で石塁が切れており，階段及び門の礎石が認められるため，こちらにも門があったと考えられる。つまりこの枡形には最低でも２箇所の門があり，二度曲がらないと主郭に入ることができず，内枡形虎口と言っても良い構えをみせている。

②郭１の搦手虎口（北側）は単純な平虎口であるが，特殊なのは郭４の西端から四度折れないと（曲がらないと）主郭に入ることができない。防御面から見ると，郭４西端から連続した虎口と考えて良い。

③郭２に入る虎口は二箇所確認されている。南虎口は平虎口（左右に石垣を有し，虎口東側には櫓基壇が残存）である。北虎口は平虎口で登り石垣（石塁）の中程を開口部にしている。

④郭３に入る南虎口は平虎口で，左右に石垣で固めた土塁を有している。

⑤井戸のある郭（郭 10）から郭４に入る虎口や，郭 13 から延びる道から入る郭 11 の虎口は，平虎口であるが，方形の空間を形成している。郭６からの城道が入る郭５の南虎口は，平虎口であるが，郭２の南虎口と同様，虎口東側に櫓基壇を有し，虎口から下段に至る城道は石垣で補強されている。

７　城郭規模【図６】

周山城跡は，東西約 1,300m，南北約 700mの規模を有しており，『織豊系陣城事典』と『京都府中世城館跡調査報告書』に掲載された山城もしくは中枢部分が丘陵頂部に位置する平山城の合計 500 件と比較した結果，京都府下では最大規模を誇っていることがわかる。

500 余城の大半は，東西規模，南北規模のどちらも 500m の範囲内に収まる。東西もしくは南北の規模が 500mを超えるものは 17 城（３％余）しかなく，これらは大規模城郭と呼ぶことができるものである。図６で示す通り，大規模城郭には，周山城を初め，福知山城跡，亀山城跡，静原城跡，八木城跡と，明智光秀に関連する城郭が５つ存在している。北白川城跡は，時代も築城主も異なる大きく三つの城跡の分布域であること，福知山城跡や亀山城跡の規模はかなり大きいが，城郭の範囲内に近世城下町部分を含むため，それを含まない周山城は破格の規模を有する山城と言える。しかし，明智光秀の主人である織田信長築城の安土城跡は東西約 1,050m，南北 1,770mであり，さらに大きい。しかも安土城跡については，城下の面積を含んでおらず，当時としては隔絶した規模を誇っている。

８　破城行為【図９，図 10】

周山城跡はまた，明確な破城行為を確認することができる例であり，石垣のある山城がどのように破城されたのかを考える上で極めて貴重である。

①郭５の北西角の石垣はＶ字状に上部の石材が欠落しており，典型的な破城行為だと考えられる。【図 10】

②郭５の北面石垣の観察から，高石垣上部の残存度に残りの良い部分とそうでない部分が交互に現れており，これも典型的な破城行為であると考えられる。【図９】

③郭６の北面石垣（遮蔽物の基底部になる石積）は，高さは低いが郭５の石垣と同様に，北西角が欠落している。これはこの曲輪と下段とを結ぶ後世の通路のために削られたのか，破城行為によるものか不明である。

④郭６の北面石垣の残存度は比較的良いが，測量範囲外の西面石垣は石材が大量に下方に転落しており，破城の可能性が高い。

９　周山城跡の文化財としての本質的価値

○江戸時代よりも前の段階の天守台が現存する希少な城であり，穴蔵式でしかも入口を三つも有する天守台は貴重である。

○明智光秀築城の城郭としては最も残りがよく，算木積みの発展過程や石の積み方，郭と郭の接続部分の石垣の構築技術などを見る上でも最適である。また，高石垣が存在するが，同時期の市内の織豊系城郭よりも立上がりの角度が急であり，幅の取れない痩せた尾根上に石垣を築く技術水準の高さを見ることができる。

○織豊系城郭の歴史を辿る上で，安土城跡から大阪城跡や聚楽第跡の間に位置するものとして貴重である。

○航空レーザー測量を用いて，曲輪の正確な配置や形状を押さえた初期の例であるとともに，城道の分析をできるうえでも貴重である。従来の研究では，曲輪の研究に重点が置かれていて，道と城との関係や道の配置，郭と麓や城下との連絡通路に関する考察が限られており，城道の機能を考える上で貴重な城である。

○虎口の形態が多様であること，枡形の初期例として考えることができる郭１の大手虎口や，虎口の脇に櫓が存在していたと見られる小規模な基壇が残存していることなど，城の防御にとって重要な門と虎口の構造を考える上で貴重である。

○山城としては傑出した規模を有しており，明智光秀が築城していることと合わせ，大変貴重な山城である。

おわりに

周山城跡の調査はまだ始まったばかりであり，これから継続して調査を進めることで，全貌が明らかになっていくと考えらえる。明智光秀の主城である坂本城跡は湖中に没し，その残存状態も良好ではない。丹波支配の拠点である亀山城跡や福知山城跡も近世城郭として貴重であるものの，光秀築城当初の姿とは大きく異なる可能性が高く，周山城跡は築城の名手と言われた明智光秀の築城技術を具体的に知ることができる貴重な城である。

また，周山城址を守る会の方々が継続的に参道の修復や説明板の設置等をしていただいており，一部の研究者や行政側が一方的に保存を考えるのではなく，地域の方々の日々の活動が遺跡の保存に重要であることを示す好例でもある。

＜参考・引用文献＞

石井敏雄　「縄野坂砦跡発見！　縄野坂の戦いは虚構か史実か」『京北の文化財』第 69 号，京北の文化財を守る会，2020 年。

馬瀬智光　「周山城跡（16A001）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告書　平成 29 年度』，京都市文化市民局，2018 年。

馬瀬智光　「周山城跡の最新調査成果」『京北の文化財』第 69 号，京北の文化財を守る会，2020 年。

馬瀬智光・新田和央　『天下人の城』（『京都市文化財ブックス』第 31 集），京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課，2017 年。

馬瀬智光・鈴木久史　「周山城跡（19A006）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告書　令和元年度』，京都市文化市民局，2020 年。

小和田哲男　「明智光秀が築いた城－周山城を中心に－」（2021 年 3 月 7 日講演会まとめ），周山城址を守る会，2021 年。

京都府教育庁指導部文化財保護課編　『京都府中世城館跡調査報告書』第２冊（丹波編），京都府教育委員会，2013 年。

京都府教育庁指導部文化財保護課編　『京都府中世城館跡調査報告書』第３冊（山城編１），京都府教育委員会，2014 年。

熊谷舞子　「周山城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告書　令和３年度』，京都市文化市民局，2022 年（予定）。

織豊期城郭研究会編　「周山城跡」『織豊期城郭資料集成Ⅰ　織豊期城郭の瓦』，1994 年。

鈴木久史・新田和央　「周山城跡（19A009）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告書　令和２年度』，京都市文化市民局，2021 年。

高橋成計　『織豊系陣城事典』，戎光祥出版，2017 年。

中井　均　「周山城跡の歴史的価値と魅力について」（2021 年 10 月 24 日講演会資料），周山城址を守る会，2021 年。

福島克彦　「丹波の国　周山城物語」『明智光秀　周山城物語』（財）京都ゼミナールハウス，1995 年。

福島克彦　「周山城築城の意義と遺構について」（1997 年２月 25 日講演会資料），京都府立ゼミナールハウス，1997 年。

福島克彦　「丹波周山城について」『城館史料学』第５号，城館史料学会，2008 年。

山本浩樹　「明智光秀の丹波支配」『平成 28 年度　京都府域の文化資源に関する共同研究会報告書（丹波編）』，京都府立京都学・歴彩館，2017 年。

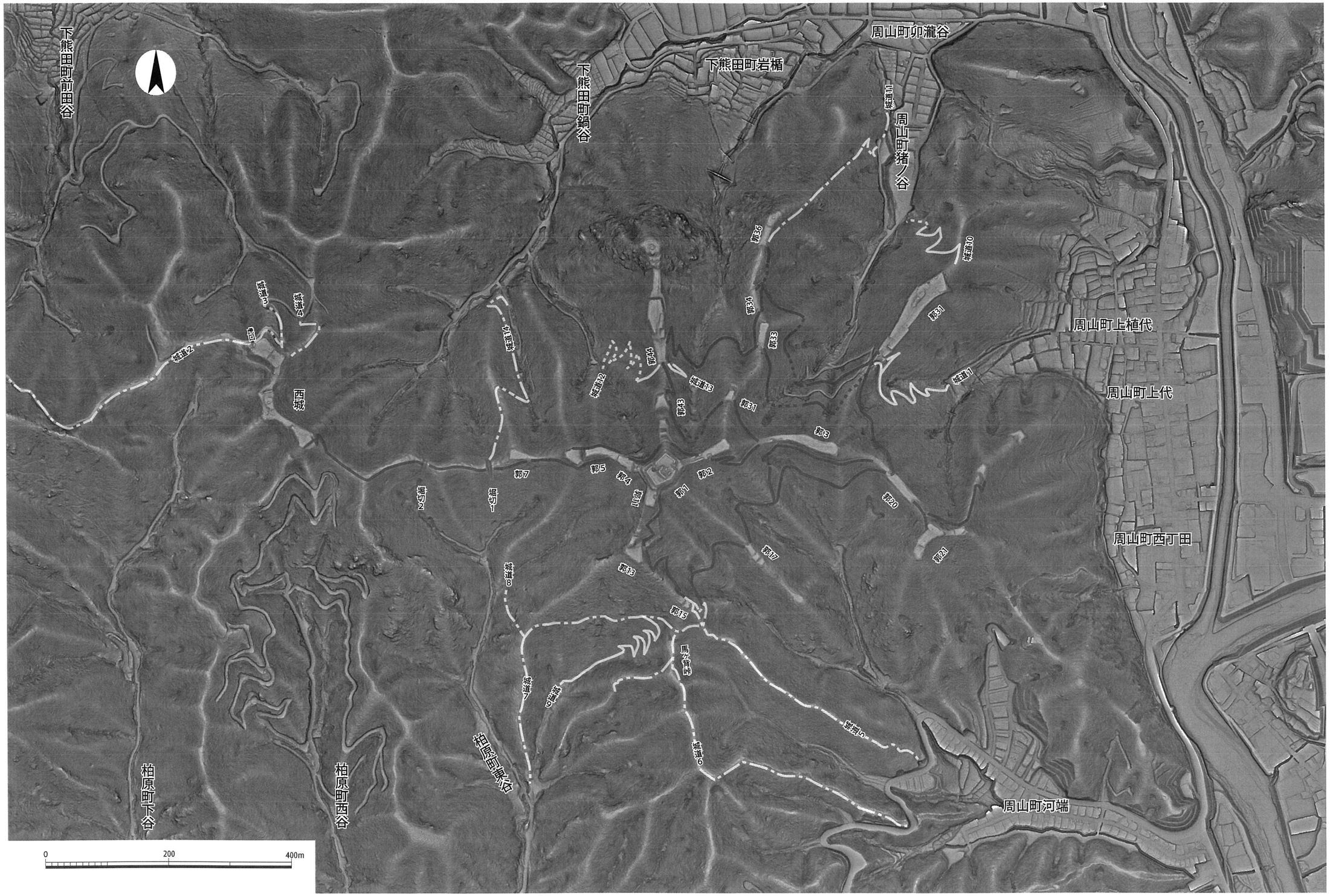

図１　周山城跡全体図　赤色立体地図

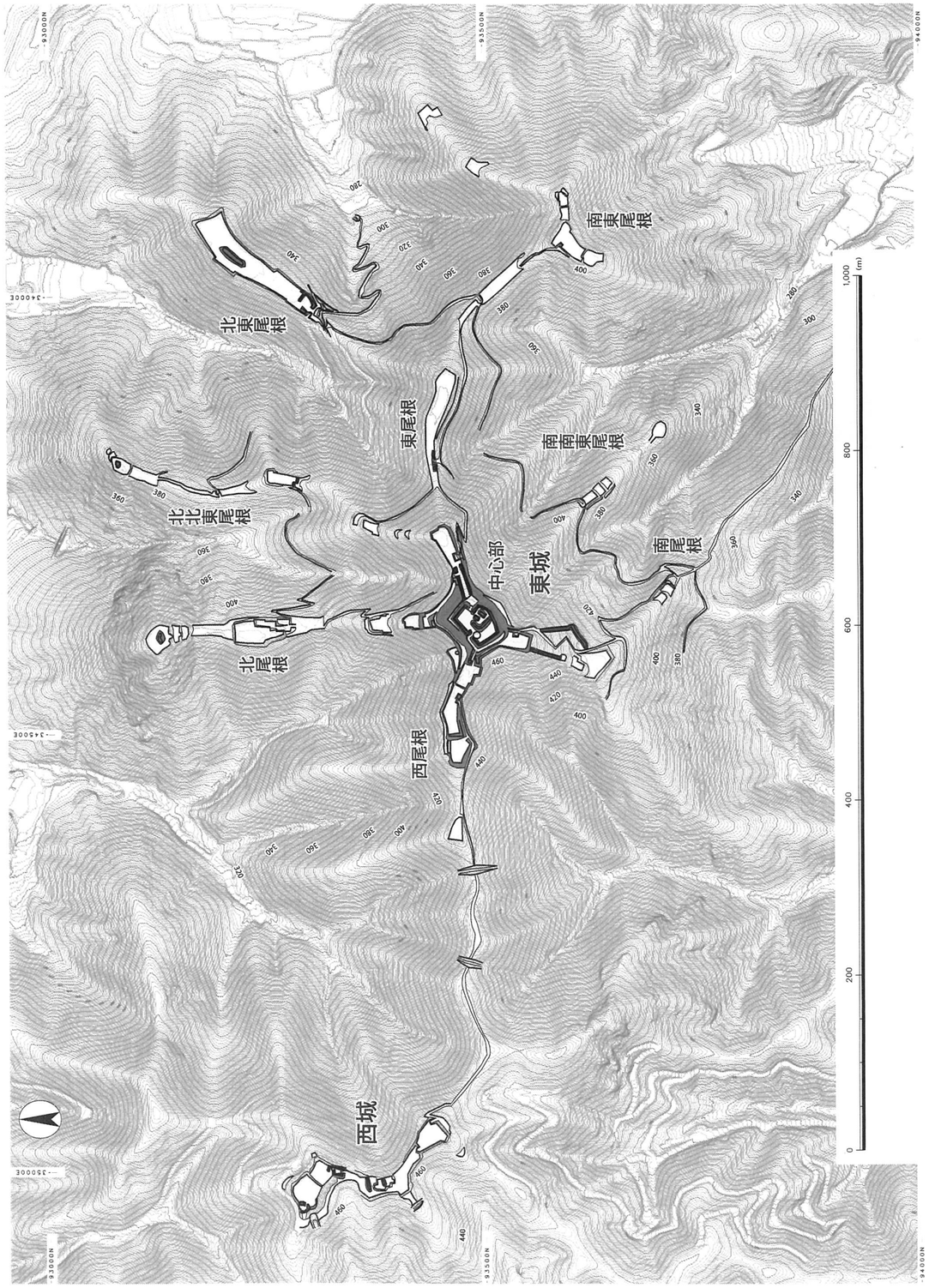

図２　周山城跡　縄張図

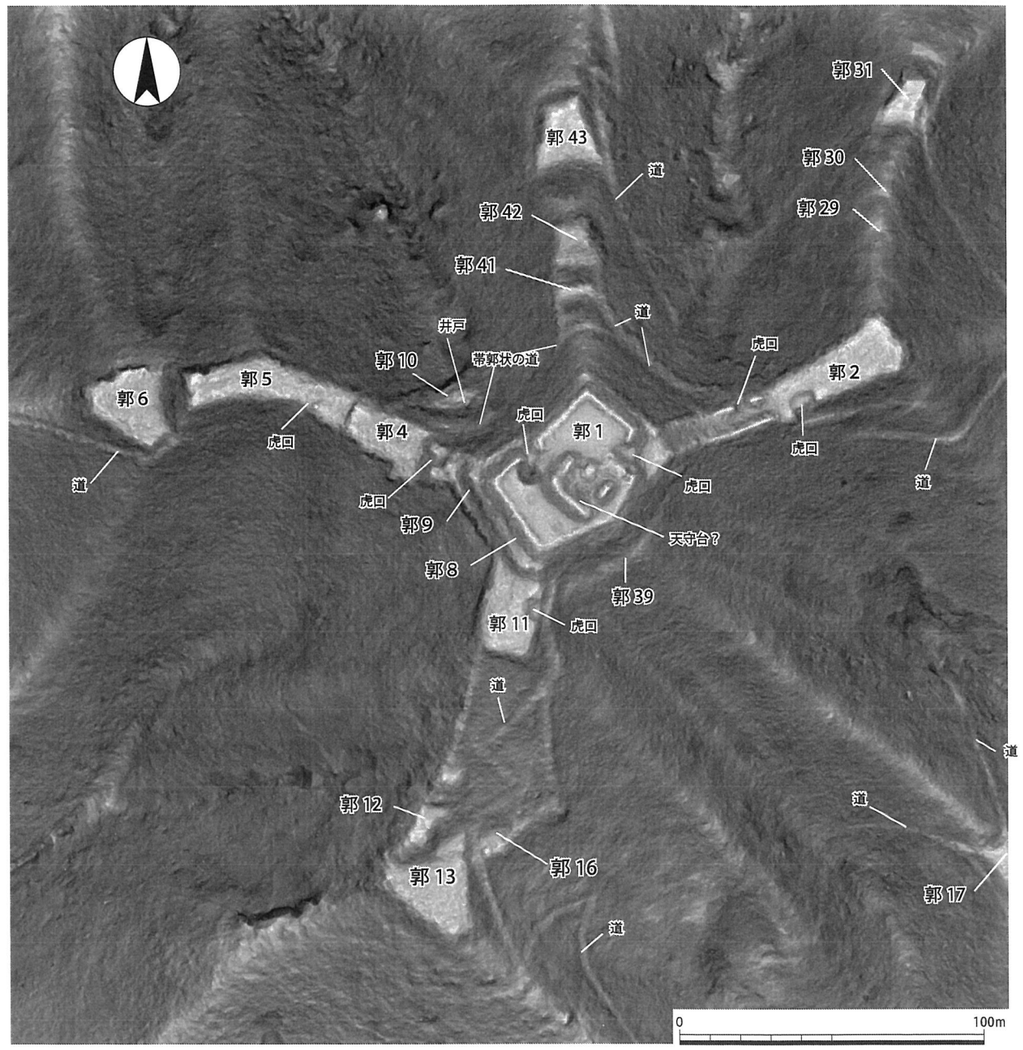

図３　周山城跡中枢部分　赤色立体地図

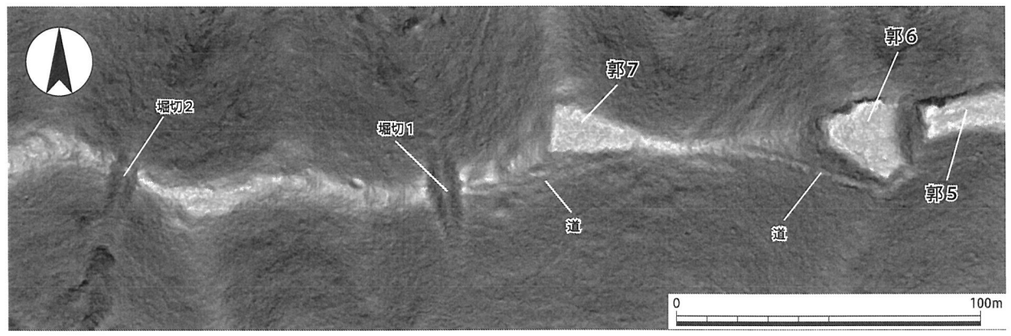

図４　周山城跡堀切部分　赤色立体地図

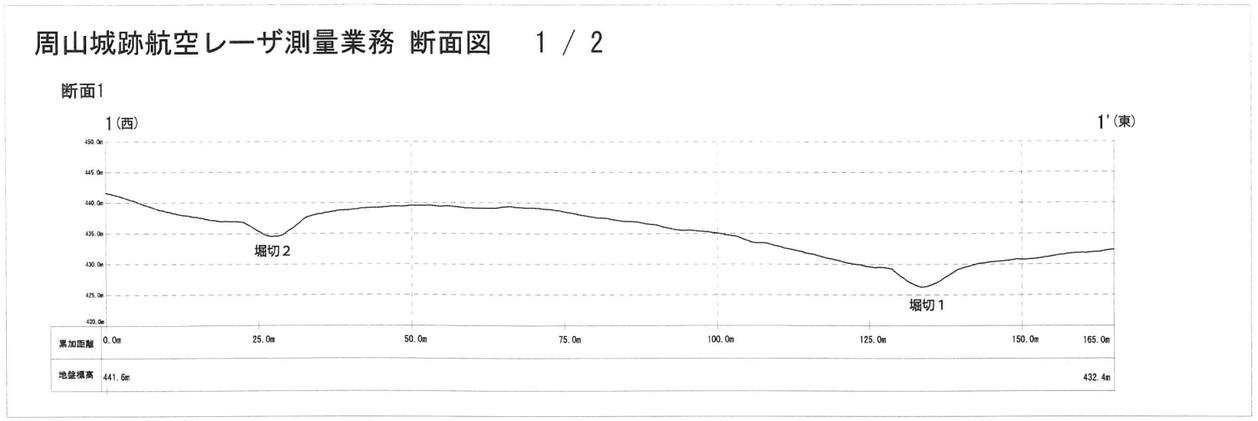

図５　周山城跡　堀切部分断面図

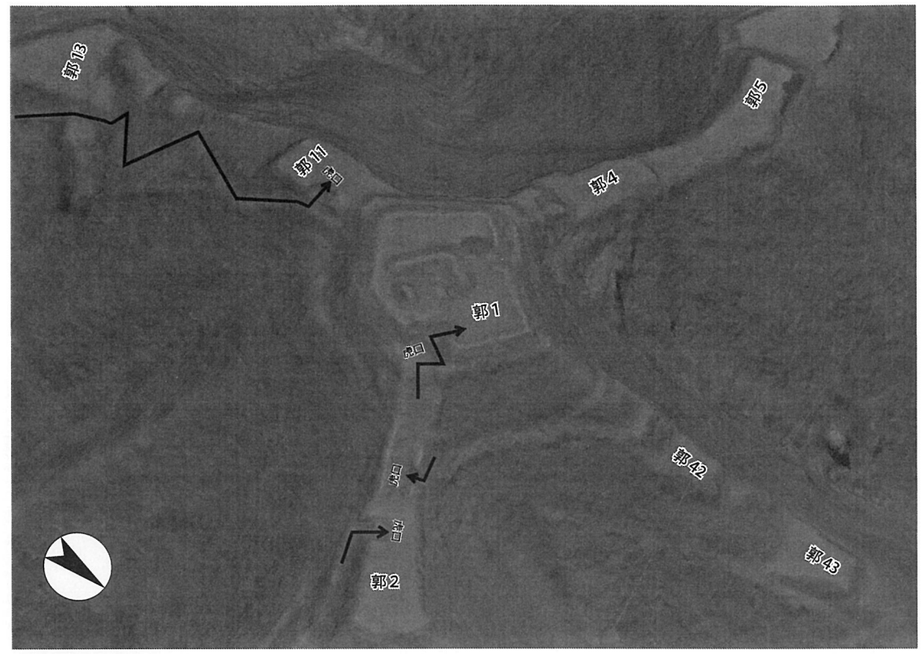

図７　周山城跡中枢部分　虎口と城道

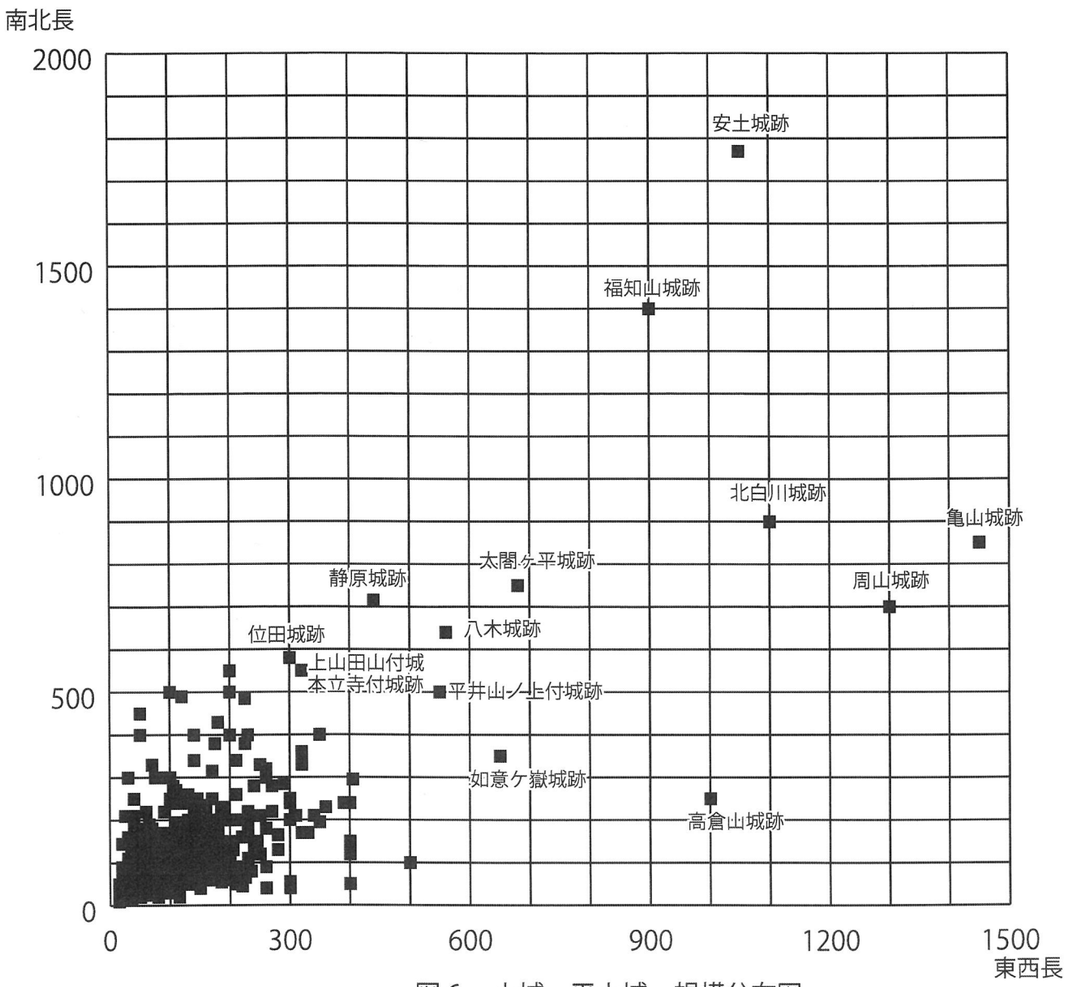

図６　山城・平山城　規模分布図

資料１

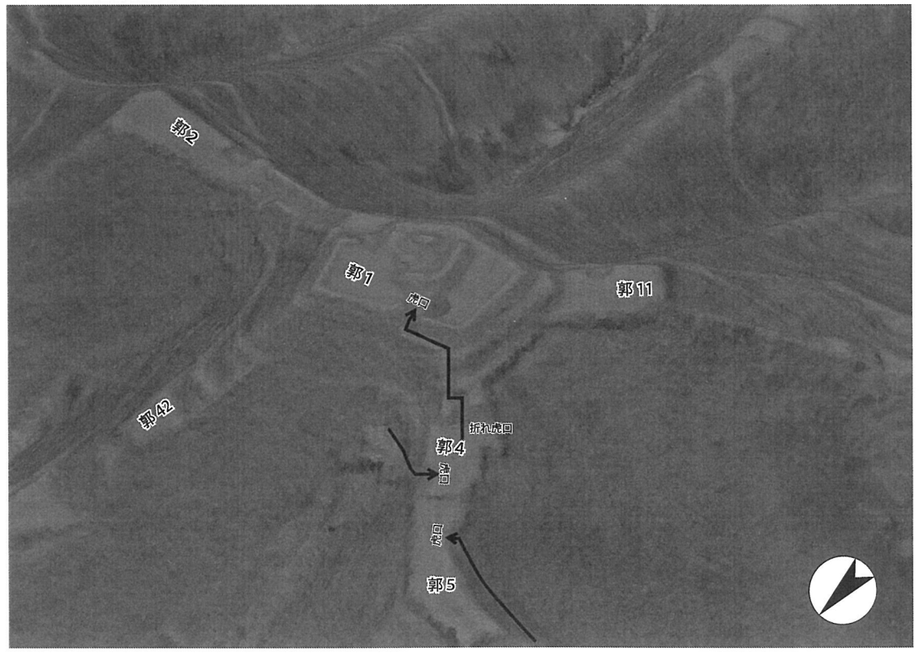

図８　周山城跡中枢部分　虎口と城道

図 9　郭 5 北面石垣　立面写真

図 10　郭 5 北面及び西面石垣　立面写真

図 11　郭 6 北面石垣　立面写真

図 12　郭 6 北面石垣　上空から

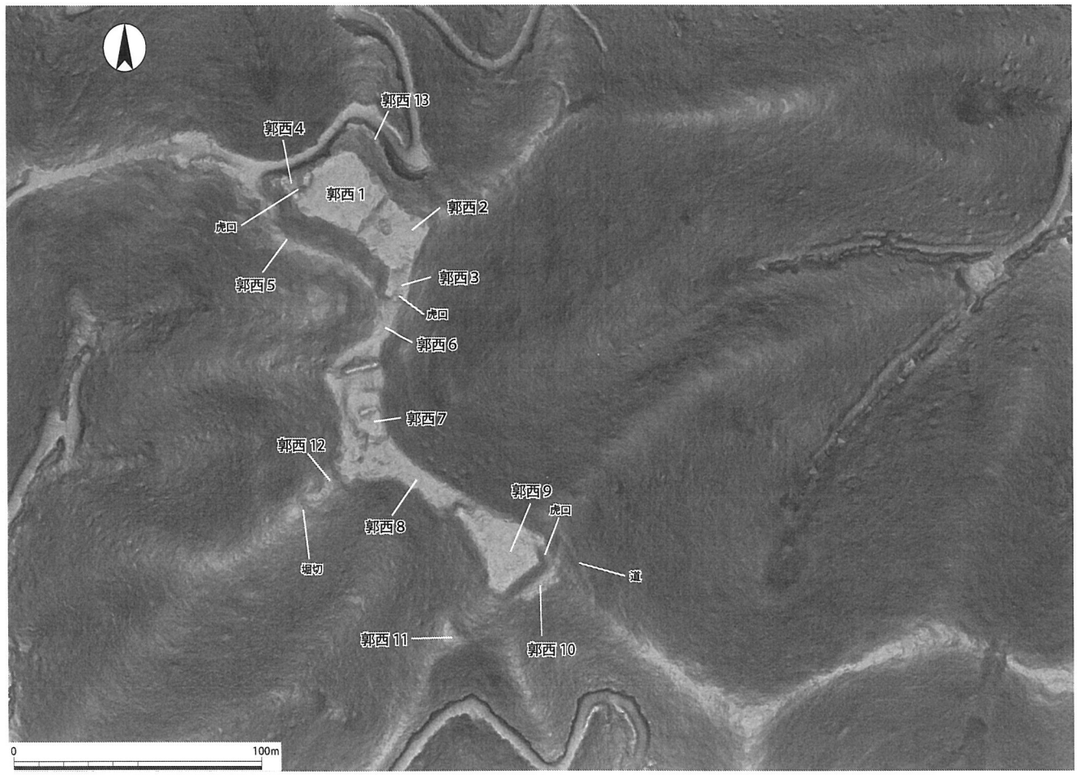

図 13　西城　赤色立体地図